

## 家庭・（われわれ）・民主主義

### 『新しい人よ眼ざめよ』

栗原 丈和

ノーベル賞受賞により、大江健三郎の小説は日本文学を代表するものとして認められることになった。

この一文は、新聞・テレビなどで似たような表現を見かけはするが、実際にはいくつかの点で納得しがたいものである。

ノーベル賞という賞を受賞したことが、大江健三郎の小説と他の小説家の小説との関係を変えてしまうわけではない。大江健三郎という小説家のマスコミや社会で占めている位置が変わったり、彼の小説の商品としての価値が変わるということはあるだろう。しかし、大江健三郎の小説やそれを形成している言葉が、他の小説家の書いた小説やその言葉との間に持っている差異・価値が変わるわけではない。

また、ある小説家やその人の小説（別に小説に限る必要はないが、ここでは便宜的に）が、ある国・地域の文学を代表するということはどういうことなのだろうか。代表するというからには、日本文学として囲いこまれている多くのものの代わりに、日本文学とはどういう特徴を持ち、どのよう

に読むものなのかということについて、その小説が伝えることができるということになる。それは日本文学として囲いこまれている多くのものが持っている様々な属性をすべて含んでいるというこ

ともなる。もちろん、実際にはそのようなものを想定することは不可能である。代表といふのを看板のようなものだと考えれば、大江健三郎は確かにその役割を演じようとしているわけだが。

既に述べたように「われらの時代」（一九五九年）以来、大江健三郎は自身を戦後世代として特権化する世代論者として扱われてきた。実際に「われらの時代」発表前後の多くのエッセイは「戦後世代」という足場から書かれていた。初期のそれらのエッセイに対しては、戦後世代の代表者、同世代の代弁者という役割を演じることができると思いこんでいる、錯覚しているという批判が与えられた。その他にも、大江健三郎は様々な相手に対して、様々な立場を代表して発言してきている。政治家に対して文学者として、評論家・研究者に対して小説家として、様々な外国の人々に対して日本人として、沖縄の人々に対して本土の人間として、社会に対して障害児の親として……

## 1

大江健三郎の小説は、従来の日本文学から断絶したところから現れたものである。その言葉は本来の日本語から離れた言葉、極端に言えば悪文である。

これが大江健三郎の登場以来の評価である。肯定するにせよ否定するにせよ、この前提は疑われたことがなかった。大江健三郎の小説・言葉はその独特さが強調されながら、一方でそれらの小説は他の日本語で書かれた小説と共に雑誌に掲載され、日本語を使う読者によって読まれてきた訳であり、それが日本文学・日本語であることは疑われたことはなかったのである。いわば、日本文学

・日本語に反したものの、日本文学・日本語ではないものでありながら、日本文学・日本語として扱われてきたものとして大江健三郎の小説を位置づけることができる。

大江健三郎の登場後、その小説を模倣した小説が書かれ、大江健三郎のような文章が多くの雑誌に掲載されるようにもなった。現在では大江健三郎の小説や文章は特殊な全く見慣れないものではなくなっている。悪評を受けながらも、大江健三郎の小説は日本文学また日本語の領域を広げてきたわけである。

日本文学・日本語に反したものという言い方をしたが、蓮實重彦に『反||日本語論』という本がある<sup>1)</sup>。『反||日本語論』という題名の意味を考えてみると、やはり「反||」という部分の持つ意味を考えざるをえない。「||」の部分を無視して考えるなら問題はないが、『反||日本語論』という題名ではない以上、それはできない。

例えば、「反||」という部分を「反(日本語論)||」の省略と考えてみる。この場合、「反||日本語論」という題名は『反||日本語論||日本語論』と読み換えることができる。また、「反||」を「反」と「||」の並立と見れば、題名は「反||日本語論||日本語論」の省略されたものということになる。他にも様々な意味づけ(こじつけ?)ができるだろうが、どちらにせよ、この題名は「日本語論」であり同時に「日本語論」ではないもの・「日本語論」に反対するもの、という意味を持っていることになる。つまり、「日本語論」から身を離しつつ「日本語論」であるという矛盾したものとして自らを主張した題名なのである。

実際に『反||日本語論』が何を語っているかについては後で述べることにする。ここでは、大江健三郎の小説やその言葉と、蓮實重彦の『反||日本語論』との間に、共通する面、日本語から身を

引き離そうとする身振り、があることだけを確認しておく。この結びつきから、さらにより具体的に大江健三郎のある小説を招喚し、『反∥日本語論』と合わせて論じてみよう。そのある小説とは『新しい人よ眼ざめよ』（一九八三年）である。

次節で詳しく述べるが、『新しい人よ眼ざめよ』はいろいろな読み方・意味づけが可能な短篇集である。しかし、従来『新しい人よ眼ざめよ』が問題にされる時には、ある偏った扱われ方をされてきた。例えば、粟坪良樹は「この連作小説は、家族とその絆そして相互扶助の力と人間の真の幸福や共同性の意味を問いかけて続けている」と述べている<sup>(2)</sup>。さらに一九九四年十月以来の大江健三郎に関する家族がらみの話題の中で、この小説は雑誌・新聞記事の資料としてしか読まれてこなかった。これは小説家の生活がマスコミで話題になる時の通例である。小説が小説として読まれるという当たり前のことが行なわれなまま、大江健三郎とその家族（特に長男）に関する物語を形成する上での素材となってきたわけである<sup>(3)</sup>。

出身地や経歴、それに小説中に引用されている過去に書いた小説からすれば、この小説には大江健三郎本人と重ね合わせることでできる小説家と、大江健三郎の家族と同じ構成の彼の家族が登場する。小説の中で起こる出来事も大江健三郎がエッセイ・座談会・講演などで自分の体験した出来事として語っているものと共通している。エッセイなどに書かれたことと、『新しい人よ眼ざめよ』に書かれたことが同じ事実として混同されるのも無理はない。ただ、『新しい人よ眼ざめよ』はあくまでも小説として書かれている。それは、書かれている出来事の中にフィクションが含まれているとか、小説家の〈僕〉やその長男の〈イーヨー〉が大江健三郎や彼の長男大江光本人とは違う性格であるということだけではない。『新しい人よ眼ざめよ』は小説として大江健三郎が他のところ

で語った、言葉を裏切る面を持つているのである、

以下の節では、『新しい人よ眼ざめよ』を小説として読む、一つの読み方を提示していくことになる。もちろん、それ以外の読み方も可能であり、ここでは従来の読み方から『新しい人よ眼ざめよ』を解放できれば、それで十分なのである。

『新しい人よ眼ざめよ』は小説として様々な側面を持つている。まず語り手の小説家（僕）と共に、読み手がウイリアム・ブレイクの詩や、（僕）自身が過去に発表した小説を読んでいく読書小説としての面である。ただ、この読書小説というところえ方は、すべての大江健三郎の小説に共通して言えることであり、登場人物による読み方の独特さ、またその独特な読みと小説の他の部分との関係のつかみにくさが、大江健三郎の小説の読みにくさ、大江健三郎（の小説）は難しいと言われる理由の一つになっている。

また、故郷の村から東京に出て来た人間が、おそらくはもう戻ることのできない故郷のこと、故郷にいたころの体験を回想している追想小説として読むこともできる。『新しい人よ眼ざめよ』の場合、この追想がさらに（僕）の読書体験と結びつけられていて前述したわかりにくさを助長している。

さらに、障害を持った（イーヨー）と呼ばれる息子を中心とする家族についての小説というところでもできる。できるといふよりも、従来はこの側面ばかりが強調されてきたのであり、確かにわかりやすく日常的な話題が書かれているように見える場面が多い。『新しい人よ眼ざめよ』以後には、これに近い形でいくつもの短篇が書かれているが、それ以前には見られないものである。ただ、この面も前の二つの側面と絡み合っている点が多く（特に短篇集の最後の、「新しい人よ眼ざめよ」

に顕著である)、美談的なとらえ方はその点を読みとばすことで初めて可能になるものである。

『新しい人よ眼ざめよ』はこの三つの面が中心になっており、この短篇集の独特さはこれらの面が重なり合い結びつき合っているところにある。そして、その特徴は「燃えあがる緑の木」(一九九三〜九五)にいたる以後の大江健三郎の小説を貫くものでもある。

本論では『新しい人よ眼ざめよ』を論じる補助線として、同じように読書・回想・家族をめぐる書かれたものとして蓮實重彦の『反||日本語論』を招喚することで、マスコミが作り出した大江健三郎をめぐる家族の物語を解体することを目指している。およそ関係が無さそうでいながら、実は多くの共通点を持っているこれらの二つの本を横に並べて、響き合わせていくことにする。

## 2

『反||日本語論』は「日本語」をめぐる書かれたものなのだが、「反||」という「日本語論」の前に付けられた言葉が示すように、「日本語」を確固とした実体をもつものとして自明視する立場や、そういう思い込みに立つて「日本語」や「日本文化」を語っているもの、語ろうとするものへの批判が行なわれている。常識的にジャンル分けをすれば『反||日本語論』は評論に分類され、小説である『新しい人よ眼ざめよ』とは同列に扱わないのが普通の態度だろう。そもそも、『反||日本語論』には大江健三郎の名前すら出て来ることがなく、蓮實重彦には別に『大江健三郎論』<sup>(4)</sup>という著書もあり、まともにいけばそちらをこの場に招喚すべきなのだろう。

しかし、島弘之が述べているように<sup>(5)</sup>、「批評家の「私」も作中人物の一人であり「作中人物」というのは、小説や虚構的文学作品だけに限った存在では決してない」。『新しい人よ眼ざめよ』の〈僕〉と『反〓日本語論』の〈筆者〉〈わたくし〉を同じ「作中人物」として横に並べて扱うことも可能なのである。そして、この二冊を横に並べてみると、前節で『新しい人よ眼ざめよ』について述べた三つの点はすべて『反〓日本語論』にもあてはまるのがわかる。また三つの面が重なり合い、結びつきあっているという点に関しても同様である。

読書「小説」としては、藤枝静男・野坂昭如・大岡昇平の小説や、いくつかの日本語をめぐる文章を読んでいる。

また、〈筆者〉または〈わたくし〉として登場する語り手の少年時代の記憶や、彼の妻の少女時代の記憶が追想されている。それが「懐かしさ」を引き起こすものとして、読書体験と結びつけられているのも『新しい人よ眼ざめよ』と同様である<sup>(6)</sup>。

さらに、〈筆者〉と妻と息子の三人の家族の生活を描いた部分もあり、それが言葉をめぐる問題の出発点や帰結点として重要な意味を持っている。

最後の点については詳しく見ておくが、例えば食卓を囲む家族の様子がそれぞれにおいて語られ、食卓における食事、または食事の前後・途中にさしはさまれる会話が、家族の関係の円滑さ、または不調を示している。

—— 光さん、夕御飯を食べよう。いろいろママが作ったからね、と話しかけた。

—— はい、そういたしましょう！ ありがとうございました！ とイーヨーは声がわりをは

じている弟とはまったく対極の、澄みわたった童子の声でいい、妻とイーヨーの妹は、緊張をほぐされた安堵と、それをこえた脱臼したようなおかしさにあらためて笑い声をあげていた。背にも躰の嵩にも、大きい差のある兄弟ふたりが、なんとか肩をくんで食卓へやって来る。そしてそれぞれ勢いよく食事をはじめる

「新しい人よ眼ざめよ」（一九八三年）『新しい人よ眼ざめよ』

あれは、子供が幼稚園に通いはじめて二カ月ほどたった折のことであつたらうか。ある夕食のテーブルで、不意にわれわれは子供の詩の朗読に接してある感動を憶えたものだ。彼は、フオークを運ぶ手をとめると、人さし指を口に持っていつて、両親たちの会話を中断すると、静聴をうながしてこう口にしたのだ。

（中略）フランス語を母国語とする母親は、その朗読と演技とにほとんど涙を流さんばかりに感激した。その心の動きに共感した父親は、この詩句が、子供にとって生涯記憶から失われることのない言葉になると直観し、やはり深い感慨にふけた。子供は、やはりある種の満足を味わいつつ、食事を続けた。

「パスカルにさからって」『反Ⅱ日本語論』

逆に、『新しい人よ眼ざめよ』の「無垢の歌・経験の歌」（一九八二年）や「蚤の幽霊」（一九八三年）<sup>(7)</sup>、それに『反Ⅱ日本語論』の「あなた」を読む」（くわしくは次節）のように、食卓の、食事の場面において家族の関係のあやうさに〈僕〉や〈わたくし〉が出会ってしまうこともある。

「読書小説」「追想小説」「家族小説」として読むということは、『反Ⅱ日本語論』に関しては言語論・日本語論としての正当な読み方から外れていることになるだろう。しかし、語り手の家族に関する個所や語り手による様々な小説についての読みの紹介、それに言葉をめぐるこれまたユニークな体験の記憶を語った個所を『反Ⅱ日本語論』から除いてしまえば、その魅力はほとんど失われてしまう。『反Ⅱ日本語論』を「小説」として読むことはその読みの可能性を拡げることにはすなわち、その価値を過小評価することにはならない。

### 3

前節の最後に「読書小説」という言葉を用いたが、『新しい人よ眼ざめよ』と『反Ⅱ日本語論』のどちらも、読むという行為をより広い意味でとらえている。普通の意味で本を読むという他の、例えば人が普段の生活の中で発した言葉を読む、さらには言葉を発した相手自体を読むという行為がなされている。特に、共通して読みにくいもの、近づくようとしてどうしても読み得ないものとして、語り手の息子が登場してくる。他の人間が持つ不可解さ、了解しにくさという点に関しては、親子とか肉親といった通常信じられているつながりは特に有効ではない。しかし、身近にいるだけによく読み得る、わかりうるものと思いついてしまいがちであり、それだけに余計に読み得ないものとして自分の前に立ち現れた時のショックが大きくなってしまふ。

しかし息子は、僕の言葉に反応することはせず、ソファにあらためて躰を沈めると、両手でしつかり顔をおさえこみ全身をこわばらせるのである。僕は（中略）脇にしゃがみこんで息子の肩を揺さぶってみもしたのだが、息子はさらに躰をかたくするのみである。理由もなく、僕は息子の顔から両手を引き剥がそうとした。ところが、息子の手は固定された鉄の蓋の堅固さで顔を覆っているのである。……考えてみれば、この時分から親としても容易にあつかいかねる、息子の肉体の抵抗力の増大が、露わになつてきていたのだが、僕はそこだけ知的な繊細さをあらわして、躰の他の部分にそぐわぬ感じの、息子の十本の指を見つめながら、そのまましゃがみこんでいるほかなかつた。

息子への接近の、この徹底的な不可能性。（中略）

これまで僕は、息子の外と内においておこっていることどもにつき、なにもかも知っているつもりでやってきた。ところが息子が発作を起し、白眼を剥いて床をバタバタ叩いていた間、かれの内面にひろがっていたはずの光景について——息子は実際大仕事をした、というように疲れ切つていびきをかいて眠ったのであり、その大仕事には、なにか重大な幻<sup>ヴィジョン</sup>を見ることがふくまれていたのではないかと感じられたのだ——僕はなにひとつ聞き出すことができない。

「怒りの大氣に冷たい嬰兒が立ちあがつて」（一九八二年）『新しい人よ眼ざめよ』

過去数年の間、実は、いま一つ、読めそうにみえて読めない言葉と深く交わりつつ日々を送っている自分に気づかずにはおれない。いわば限界領域に拡がりだしたとでもいふべきその言葉



八三年)の中では、(僕)の息子との生活を出発点とした過去のいくつかの小説(それはすべて大江健三郎自身の書いた小説と重なる)が紹介されている。

『反Ⅱ日本語論』を招喚したのは、『新しい人よ眼ざめよ』の(僕)と息子の関係を特別視しないためでもある。『反Ⅱ日本語論』の息子は、引用にもあるように、(イーヨー)のような障害を持つてはいない。「ごく普通の」小学生である。もつとも、わざわざ「ごく普通の日本人の三年生」と断わつてあるものの、実際は彼は日本の社会においては(おそらく現在でも)限られた人間のみが置かれる境遇にある。つまり、日仏の混血であり、いわゆる「帰国子女」でもあり、場合によっては障害児と同様に差別の対象になりかねない存在である。『反Ⅱ日本語論』のユーモラスな筆致がそれを感じさせないようになってはいるのだが。

そうはいっても、この『新しい人よ眼ざめよ』と『反Ⅱ日本語論』の二つを特殊な境遇にある子供との生活(共生)を語つたものとして括ることは避けねばならない。どちらも、どこにでもあるような生活上の不具合をわかりやすい形で示しているだけで、実際には特殊な話が語られている訳ではないのである。普段は自分にとってよくわかると思っていた相手が、突然わからないものになつてしまうということはどのような関係でもありうる。というより、もともとよくわかるという判断の方が、錯覚・思いこみに立っているのである。『新しい人よ眼ざめよ』や『反Ⅱ日本語論』でわからない状態が問題化されているのは、親子という関係がそのような錯覚・思いこみを助長させるものだからである。先程の『反Ⅱ日本語論』の引用の中に「読めそうにみえて読めない言葉」という言い方があるが、「読めそうにみえ」という感覚の無根拠さが「読めない」体験を通して明らかになるのである。

さて、もう一つ『反||日本語論』から『新しい人よ眼ざめよ』へ補助線を引くために、次のところを読んでいくことにする。

第一人称・複数というからには、この「ぼくたち」 *nous* とは、何ものかの複数でなければならぬ。事実、この単語を修飾すべき形容詞やそれに類する言葉は、ほとんどの場合、複数型に置かれてその符牒としての*s*を伴うのが常識とされる。では、何の複数なのか。(中略)フランス語の「ぼくたち」 *nous* とは、「ぼく」の数倍化されたものではなく、この「ぼく」と、「ぼく」ならざる他の人称の集合からなりたっていて、その構成要素相互のあいだには「排他的関係」が成立しているのだ。すなわち、「ぼくたち」 *nous* が主語となった場合には、「ぼく」 *je* が、「きみ」 *tu* と「きみたち」 *vous* 、「彼(または彼女)」 *il* と「彼ら」 *ils* に対して「優位」な地位を占める、ということである。

(中略)

この、いささか短すぎるかも知れぬ考察は、しかしその短さにもかかわらず、「人称代名詞」の体系の背後に、フランス語の構造的特性を総体として浮きあがらせてくれる。フランス語とは、まず何よりも「排除」の体系なのだ。「人称代名詞」の三つの人称の間には、その一つを

口にした瞬間に、相互の緊張関係が働く。そして、その三つの人称は、かりにある複数性の中に融合しているかにもえながら、たがいに相手をうけいれず、「優位」と「劣勢」の関係を顕在化させずにはおかない。ところで、日本語の「ぼくたち」、「われわれ」には、こんな「排斥」作用が含まれているであろうか。そこにあるのは、「ぼく」あるいは「われ」の、無数の共犯的融合ばかりではないか。そもそも文法的にいつて、日本語の「ぼく」と「ぼくたち」の間に、単数、複数の対立関係が存在しているのか。あるのは、意識の上での孤立と融合だけであつて、数の概念そのものが日本語にはかけているのではないか。

「「あなた」を読む」『反∥日本語論』

また長い引用になつたが、この個所に出て来る「排他的関係」や「排除と選別」というのは『反∥日本語論』のキーワードであり、この本のすべての章において重要な意味を持つている。それが西欧を西欧たらしめているものであり、西欧(語)と比較することとなりたつて多くの日本(語)論が見逃しているものであると『反∥日本語論』には書かれている。そして、西欧がその「排除と選別」の体系を秩序づけるために、または覆い隠すために採用した制度として「民主主義」がとらえられている。そこでもう一つ重要になつてくる概念が、「代表」ということになる。

ここ一世紀ばかりの西欧が政治的に採用した民主主義と呼ばれる制度は、断じて多数決による意志決定を基盤とはしていない。それは、何よりもまず代表の制度と理解さるべきものである。実際、代弁者を欠いた民主主義というものなど誰も想像することはできまい。諸々の声が、た

だおのれ自身の声として響きわたる空間には、民主主義は存在しない。声が、いま一つの声にその響きを委託することで初めて機能する制度が民主主義なのだ。(中略)この排除と選別とをいたるところ、あらゆる瞬間に機能させうる代表の階層的秩序こそが民主主義なのであって、多数決原理なるものはそのとるにたりない脇役にすぎない。

「シルバーシートの青い鳥」『反Ⅱ日本語論』

民主主義が「代表」、代弁の制度であるということをもう少し具体的に述べておくと、例えば選挙において有権者がある候補者に投票し、その候補者が当選して議員として、議会に行ったとする。これはこの議員が有権者を代表し有権者の意見を代弁することであり、同時に彼に投票した有権者が政治の場である議会から排除されているということでもある。代表・代弁といっても、あまたいる有権者の言葉を一人の人間が代弁できるはずがなく、実際のところ一人の人間の言葉を代弁することさえ不可能である。

ここで、また新たに『反Ⅱ日本語論』を『新しい人よ眼ざめよ』と、というより大江健三郎自身と結びつける点が出てきている。ここで、「代表の制度」と定義されている「民主主義」こそ、デビューまもなくから現在にいたるまで大江健三郎につきまといてきた言葉である。もちろん、大江健三郎自身が多くのエッセイでこの言葉をキーワードとし、自分の仕事がこの言葉と共に語られることを認めてきたのでもある。

ぼくは上下二冊の『民主主義』というタイトルの教科書が、ぼくの頭にうえつけた、熱い感

情を思いだす。(中略)『民主主義』を教科書に使う新しい憲法の時間は、ぼくらに、なにか特別のものであった。そしてまた、修身の時間のかわりの、新しい憲法の時間、という実感のおりに、戦争からかえってきたばかりの若い教師たちは、いわば敬虔にそれを教え、ぼくら生徒は緊張してそれを学んだ。ぼくはいま、『主権在民』という思想や、『戦争放棄』という約束が、自分の日常生活のもっとも基本的なモラルであることを感じるが、そのそもその端緒は、新制中学の新しい憲法の時間にあつたのだ<sup>100</sup>。

私は新制中学の先生から、その人は同じ村の、富裕な農家の息子さんでしたが、民主主義という言葉を習ったのです。つまり、自分たちの力で生きていい、ということだと先生はいわれた。さらにこの村だけでなく、国というものまで、その方針を自分たちが決めるものだと言われ、先生はいわれた。それが私をほんとうに励ました。私はそのように生きてやろうと思いました<sup>101</sup>。

これらの文章は、それぞれ一九六四年、一九九五年に発表されたものである。大江健三郎が一貫して語り続けている「民主主義」が彼の読書体験に基づいているものであるのは、以上の引用から明らかである。そして、理想的であることを批判されるのも納得できる。ここでは、「主権在民」や「自分たちの力で生き」といったキャッチフレーズは語られているものの、それが具体的にどのような制度によって、誰の手によって、どのように運営されるのかは全く触れられていない。おそらく、全員の意見が反映され全員が不当な扱いを受けていない状態、またはそれを目指すことを「民主主義」と呼んでいるだけである。それは、民主主義に反するのがどのような状態として語ら

れているかを見るとわかる。

私は子供を理解しようとしていた、あるいは子供の側に立って生きていこうとしてきた。それはいまでもね、そのようにいうことができるのじゃないだろうかと思えます。

一所懸命そうしてきたんだけど、知らず知らずのうちに、自分が家庭のなかで子供より優位に立っているということがあったのじゃないか？ 小説では自分の家庭生活を正直に描写しているのです。それをあらためて読んでみて、どうしても父親としての自分が上位にあって、子供が下位にある、そういう気がした。その下位にある子供は障害を持っている子供ですから、父親ととくに親密な関係があります。自分がその子供を保護している、しかも喜びを持ってそうしているという気持ちがありますから、自分が彼を支配しているというつもりはなかった。自分の家来として、この子供を自分の権力の下に置いておきたいという感じはしませんでしたよ。

ところが、そうであるけれども、実際に小説を読んで批評してもらうと、どうも自分を本質的に上位に立たせているところがあつたのじゃないか、それを認めざるをえない。上位に立つということをさらにいえば、圧政者としてかれに向かっているところがあつたのじゃないかという気持ちを私は新しく持ったのです。その考えに立って小説を読んでみますと、どうもそういう気配が見えてくるんです。すなわち、家庭における親の上位、子供たちの下位、権力を持って支配するもの、それによって支配される者という、よくある構図が自分の家庭にもあつたのじゃないかということに少し気がつき始めているわけです。

(中略)

つまり、家庭関係に上下関係があるというのはどうも不健全なのではないか？ 根本的に危険なことでないか？ その圧迫をひっくりかえす、新しい上下関係をつくることによつてのみその問題を解決する、ということこそをこれまで私たちはしてきたのではないか、いま現にし続けているのではないか、そういうことを私は自分についても反省しながら思います。

その対案は何かというと、対等な関係をつくるということのほかないでしょうか、単純なことを申しあげますが。横に並んで、対等な関係をつくる。民主主義的な関係といつてもいいんですが、お互いにそういう関係をつくるということが、私たちが家庭においても上下関係から解放される方法ではないか？ それが考え方の原理ではないか、と私は思うのです。

講演「「家族のきずな」の両義性」（一九九四年）の一部である。長文の引用になったが、引用の前半には大江健三郎自身が『新しい人よ眼ざめよ』を読み直しての感想を語った箇所を含んでいる。この引用では『新しい人よ眼ざめよ』に「正直に描写」されている「自分の家庭生活」における親子の関係が「上下関係」を含んだものであることを認めている。そういう関係は「不健全」なものであり、それに対する理想的な「家庭関係」として、「横に並ん」だ「対等な関係」である「民主主義的な関係」をあげている。

「正直に描写」とするといった言い回しも含めて、ここではあまりにも素朴な感想が語られている。本章以前に述べてきたように、いくら書き手が「正直に」書くとしても、また書いたものを読むで「正直に」書いたという感想を抱いたとしても、それが何らかの意図・偏向を含んでしまうのは当然のことである。また、あらゆる関係は常に上下関係を含むものであり、そもそも「対等な関係」

というのには形容矛盾である。もちろん、「家来として」「子供を自分の権力の下に置いて」という言い方をしているように、ここではあからさまな権力、支配・被支配を含まない関係という程度の意味で使われているのだろう。しかし、そのような一見「「圧政」・「圧迫」が行なわれていない関係こそ、現実の権力関係を隠蔽しているのである。しかし、大江健三郎のエッセイにおいてはこのような見方はとられていない。

『「反」日本語論』における「排除と選別」を司る「階層的秩序」としての「民主主義」というとらえ方は、このような大江健三郎のエッセイが語るものとは相反している。しかし、ここで大江健三郎自ら批判の目を向けている『新しい人よ眼ざめよ』においてはどうか。「対等な」「民主主義的な関係」を理想とせず、そこで語られている「家庭関係」を読むとどうなるのだろうか。

## 5

前節の「「反」日本語論」の引用では、「第一人称・複数」を持つ「排除」の機能について語られていた。もちろん、それはフランス語における「第一人称・複数」の機能についての指摘であり、「日本語の「ぼくたち」」「われわれ」については、「無数の共犯的融合」しかないと言っている。ここでいう「日本語」というのが何を指しているのかは明らかではない。はたして大江健三郎の「日本語」がそれにあてはまるのかどうか、実際に『新しい人よ眼ざめよ』を見てみよう。

『新しい人よ眼ざめよ』の中では、それほど何度も「われわれ」という言葉が用いられている訳ではない。長男の〈イーヨー〉に対して両親や他の家族を含めてそう呼んでいる場合や<sup>(12)</sup>、「鎖につなげられた魂をして」に登場する学年・偽〈宇波君〉が、自分と同じ政治活動を行なっている人間を総称して用いている他は、ほとんど出て来ない。「われわれ」という言葉の使用がおさえられているために、それが用いられている以下の個所が印象に残る。

僕はしばしば夢見てきたのだ。息子の成長につれて、時どきの僕ら二人程変化しているが、暗い谷の母親と家族は変わっているようでない、われわれみなな光景を。

「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」  
——イーヨー、排骨湯麵とペプシコーラおいしかった！ と息子が答えると、自分たち親子のあいだでいま完全なコミュニケーションがおこなわれた、と考えて幸福になった。

「魂が星のように降って、跗骨のところへ」

「雨の木」<sup>レイン・ツリー</sup>のなかへ、「雨の木」<sup>レイン・ツリー</sup>をとおりぬけて、「雨の木」<sup>レイン・ツリー</sup>の彼方へ。すでにひとつに合体したものでありながら、個としても自由であるわれわれが、帰還する……

(中略)

僕とイーヨーがそのようにして死の領域に歩み入り、時を越えてそこにとどまる。このヴィジョン自体からの返照がおよんでくるように、いま現在の僕とイーヨーの共生の意味があかるみ

に浮びあがる。

「新しい人よ眼ざめよ」

ここで用いられている「われわれ」という言葉は、「ぼく」あるいは「われ」の、無数の共犯的融合」を表しているのだろうか、それとも「われ」による「排除」の体系」、「われ」と他の人の間の「相互の緊張関係」なのだろうか。

これらの引用では、いずれの場合も「われわれ」という言葉は、〈僕〉と〈イーヨー〉の二人を指しており、二人の間に完全なコミュニケーションが行なわれたり、二人が一体化する状態で用いられている。ただ、これは〈僕〉が望んでいる夢想・理想であり、現実にはそのような関係があるということではない。実際、これは適えられないはずのないこととして語られている<sup>(30)</sup>。つまり、この夢想は〈僕〉と〈イーヨー〉が本来別の人間であり、一体化することもなく、また同じことを考え、同じことをするということもありえないという前提のもとで語られているのである。「われわれ」という言葉が用いられていることで、逆に「われわれ」という言葉によって囲いこまれている二人の違いが強調されることになっている。

これらの「われわれ」という言葉が用いられている個所で語られていることそのものは「融合」した状態である。しかし、同時にその「融合」状態の不可能性が明らかにもなっている。〈僕〉が〈イーヨー〉によって「排除」されているのか、〈僕〉が〈イーヨー〉を「排除」しているのかは明らかではない。おそらく、その両方なのだろうが、ここでおさえておく必要があるのは、二人の間に「緊張関係」が維持されているということである。もちろん、これは〈僕〉の夢想の中のこと

であり、実際の〈僕〉と〈イーヨー〉の間の関係と同じに見ることはできない。しかし、確かに〈僕〉の意識が語る言葉の中で、人と人との関係が決して「対等」にはなれず、まして「融合」などできるはずはないということは自覚されている。

さらに「新しい人よ眼ざめよ」の末尾、〈イーヨー〉が福祉作業所から戻ってきた日の夕食の場面では、それまでとはまた別の形で「われわれ」という言葉が用いられている。

息子よ、確かにわれわれはいまきみを、イーヨーという幼児の呼び名ではなく、光と呼びはじめねばならぬ。そのような年齢にきみは達したのだ。きみ、光と、そしてすぐにもきみの弟、<sup>さくら</sup>桜麻とが、ふたりの若者としてわれわれの前に立つことになるだろう。

この二つの「我々」という言葉のうち、前の方は〈イーヨー〉に対して〈僕〉を含む他の家族のことを指している。〈僕〉以外の家族が「呼び始めねばならぬ」という、悔恨を含んだ義務的な意識を持つているかどうかはわからない。それでも、この前の場面では他の家族が長男のことを「光」という呼び名で「呼び始め」ており、その事実をここでは指摘している。では、その後の「われわれ」という言葉は誰のことを指し、誰を含んでいるのだろうか。

まず考えられるのは、「ふたりの若者」に対する旧世代、この場面では〈僕〉と彼の妻がそれに当たるということである。「新しい人よ眼ざめよ」の中には、〈僕〉と共に妻もまた老いてきたということを語る箇所もある<sup>(註)</sup>。もつとも、彼女は『新しい人よ眼ざめよ』の中で繰り返し家族に対する〈僕〉の考え方についての不満を表明している<sup>(註)</sup>。彼女自身は、「われわれ」という言葉で

囲いこまれることに異和感を感じるだろう。しかし、「われわれ」という言葉を一度用いてしまえば、人と人との間にある違いは隠され、意識のずれには関係なく、あたかも二人が共通する点を持つているかのように語られてしまう。またもう一つ、この「われわれ」によつて、書き手の〈僕〉と読み手とを「融合」させようとしている、という見方もできる。このような「われわれ」の用い方は批評によく見られるものであり、実際には「わたし」という言葉で置きかえても何の支障もないものである。そのような「われわれ」には何の緊張感もない。「われわれ」という言葉を禁欲的に用い続けてきた『新しい人よ眼ざめよ』で、最後になってこのような、ただ抑圧的であるだけの、またただ緊張感を欠いただけの「われわれ」が現れるとは考えにくい。それでは、この二つ目の「われわれ」はどのような言葉なのだろうか。

この引用の後では、ブレイクの詩の一節が引用され、「ふたりの若者」の「脇に、もうひとり若者として、再生した僕自身が立っているようにも感じた」という言葉が続く。もちろん、これも「一体化」した「われわれ」と回様に実現しえない夢想に過ぎない。しかし、「一体化」の夢想が、その裏側に〈僕〉と〈イーヨー〉の違い・ずれを顕在化するという意味を持っていたように、ここでの「再生」の夢想も〈僕〉が一回きりの生を生きているということとを再確認させている。決して「再生」することのできない生を生きている〈僕〉を含む「われわれ」、そこで名指されているのは〈僕〉と同様に一人で死ぬことを定められているものたちである。ここに現れているのは複数であることにより、孤独であることが明らかになる「われわれ」なのである。

- (1) 筑摩書房、一九七七年五月刊。引用は、ちくま文庫（一九八六年三月刊）による。
- (2) 「代表作ガイド 新しい人よ眼ざめよ」（群像日本の作家23『大江健三郎』小学館、一九九二年八月刊）。
- (3) 既に紅野謙介『新しい人よ眼ざめよ』 方法としてのイーヨー（『国文学』一九九〇年七月号）はこのような見方から距離を置いている。なお、この後の本章の『新しい人よ眼ざめよ』のとらえ方は、この批評を参考に行っている。
- (4) 青土社、一九八〇年十一月刊。
- (5) 「感想というジャンル」『群像』一九八七年二月号。引用は『感想というジャンル』（筑摩書房、一九八九年三月刊）による。
- (6) この「懐かしさ」という言葉だが、どちらか懐かしいといっても過去を懐かしむのではなく、を生き抜いていく中で見出していく感覚として使っている。
- (7) 「三日ほど前、皿にあるものをわざわざ一度に頬ばってむさぼるようにする息子の、おそろしく早い食事に遅れて、妻たちが食堂の隅にかたまって夕食をつづけていると、台所から庖丁を持ってきた息子が、両手で握りしめたそいつを胸の前にささげるようにして、家族とは反対の隅のカーテンの脇に立ち、暗い裏庭を見つめて考えるようであったという……」（「無垢の歌、経験の歌」『新しい人よ眼ざめよ』）。
- また「蚤の幽霊」には頑なに山荘に行きたがった息子と二人だけで駄弁を食べる場面がある。
- (8) 「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」の息子と共に谷間の村に帰郷する夢想の場面や、「新しい

人よ眼ざめよ」の〈僕〉と〈イーヨー〉が「合体」することを夢想する場面など(どちらもその一部を第5節で引用している)。

(9) 「個人的な体験」(一九六四年)・「父よ、あなたはどこへ行くのか?」(『表』(一九六九年)・「洪水はわが魂に及び」(一九七三年)が、ブレイクを「自分の小説にみちびきこんだ」例としてあげられている。

(10) 「戦後世代と憲法」(一九六四年)。

(11) 「時代から主題をあたえられた」(一九九五年)。

(12) 「僕と妻は、息子に向けて不用意に死という言葉を使ってきたのだ。それをわれわれに自覚させた、ひとつの契機を手がかりにふりかえれば、二年以上も前から、繰り返しして」(「怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって」)。「この六月の誕生日で二十歳になる息子に向けて、われわれの、妻と弟妹とを加えてわれわれの、これまでの日々と明日への、総体を展望することに動機はあった。」(「新しい人よ眼ざめよ」)。

(13) 二つ目の引用はかつて書いた小説(本文中に『父よ、あなたはどこへ行くのか?』の名前があがっている)を〈僕〉が引用したものであり、「父よ、あなたはどこへ行くのか?」の小説の引用の後の個所では〈イーヨー〉が〈僕〉と独立して生きていけることに〈僕〉が気づくことになる。

(14) 〈僕〉は、妻が「老眼鏡をかけた頭をそらせるようにして」針仕事をする姿をみて、あらためて「思いがけない気持」をいだいている。

(15) 例えば、「新しい人よ眼ざめよ」では「無垢の歌、経験の歌」を読んだ妻が、その中に書かれている〈僕〉の〈イーヨー〉に対する見方を批判する場面がある。